

トップランナー
に聞く

「活動が続けていくことで やがて大きな動きに」

ドイツ・バウビオロギー運動の創始者

ホルガー・ケーニツト氏

インタビュー②



1951年ミュンヘン生まれ。ミュンヘン工科大学、同大学院で建築を学ぶ。83年にエコロジー建材店および家具工房の経営の傍ら、設計事務所を主宰。96年よりエコプラス社を設立し、建材の認定およびコンサルタントに携わる。著書に「健康な住まいへの道・バウビオロギーとバウエコロジー」建築資料研究社がある。(プロフィールは上書より参照)

ドイツでバウビオロギー・バウエコロジーに長年関わるホルガー・ケーニツト氏に日本におけるバウビオロギーの現状についてお話をうかがった(1月30日号からのつづき)。

Q 住み手の快適性をつくらなければならない。建築設計には人間の感覚を働かせるという視点が重要だということがわかりました。

A 快適性の話では、照明も重要な要素です。日本でも住宅やオフィスでは採光や照明への関心が薄いと感じました。

たとえば日中の強い日差しが窓から目に入ると急激に瞳孔を収縮します。一方コンピュータのスクリーンは暗く、瞳孔は拡張する。このような瞳孔の収縮・拡張の繰り返しですが、肩こりやストレスにつながります。日中の日差しは目の負担にならないよう調整しな

感覚を持たないのでとても複雑です。

イオン状態が体に与える影響について、ドイツでは主に医学の分野でこれまで多くの臨床実験がされてきました。その結果わかってきたことは、イオン自体には害はないが、イオンの不調和状態になった結果として、たくさんホコリや塵などが多い環境が生まれる、これが人体に影響を与えるということでした。

イオン状態に関する私たちの答えは、室内と室外のイオン状態を同じに保つ、ということです。この点で言えば、ナイロン・ビニール・プラスチックなど合成樹脂の素材や表面仕上げは好ましくない。換気設備によって常に動く空気の摩擦によって静電気が起こり、

室内のイオン状態を変えてしまうからです。

最初は食べ物だったのが、やがて衣服、自分たちの身の回りにある家具、室内環境へと少しずつ関心が広がっていき、一度興味をもつと、それまで当たり前と見過ごしてきたいろんなことに質問が浮かびます。木の机に手を載せてもなぜ冷たくないのか、手のひらに汗をかいても木の机の表面が濡れないのはなぜか。そういうところから、

ナチュラルマテリアルはほんの50年前までごく当たり前に使われてきました。年配の方なら、幼少期の体験を持っているでしょう。この50年で、有害物質も、合成樹脂も、そして遺伝子組み換えやナノテクノロジーによって、私たちは何を失ってしまったのかをもう一度考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

バウビオロギーの考え方を知ってもらい、理解してもらうために活動してきた30年間は簡単ではありませんでした。しかし、日本ではたとえばイケダコーポレーションという会社は建築専門家とともにドイツを訪れる活動を10年続けられています。また前橋工科大学の石川恒夫氏は、日本において2005年にバウビオロギーを視点に活動する組織(日本バウビオロギー研究会)を発足しました。

Q バウビオロギーの立場から、日本のつくり手のみなさんに何かアドバイスはありますか？

A 皆さんはぜひ、身の回りの建材にどんなものが使われているのか、それが自分にどのような影響を及ぼすのか、ということに興味を持つことです。(終わり)

食べ物・衣服・家具から室内環境へ、興味広げて